

Title	アーネスト・ハートとアリス・ハートのジャポニスム 収集と応用の交錯
Author(s)	橋本, 順光
Citation	アーツ・アンドクラフツと民藝 : ウィリアム・モリス と柳宗悦を中心とした比較研究. P.21-P.29
Issue Date	2015-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/76030
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

アーネスト・ハートとアリス・ハートのジャポニスム 収集と応用の交錯¹

橋本 順光

はじめに

1891年の3月から5月にかけて、英国からアーネスト・ハートとその妻アリスが日本を訪問した。『大英百科事典』の第11版(1910)によれば、アーネストは元々眼科医であったが、むしろ本領は医療ジャーナリストとして医療改革や社会改良に取り組んだところにあった。とりわけ『英国医学雑誌 (*British Medical Journal*)』の編集長として辣腕をふるい、来日時にも、同雑誌について詳しく説明を述べている。この『大英百科事典』の項目の最後には、彼が再婚したアリスについての短い説明がある。彼女も元々はロンドンとパリで医学を学んでいたのだが、アーネストとの結婚後は、夫と共に慈善活動に身を捧げ、アイルランドの工芸に多大な貢献をしたという。²

もともと医学を学んでいたアーネストとアリスは、それぞれその道から離れてゆき、分野は違えど、社会改良に熱心に取り組んでいったということになるだろうか。ここで見落とされているのは、二人が、とりわけアーネストが英国有数の日本美術コレクターであったことである。しかし、二人の日本美術への態度は大きく異なっており、それは二人の活動とも大いに関係してくることとなった。ハート夫妻の活動は多彩なだけに、これまで断片的に言及されてきたわけだが、本稿では、両者の接点とその交錯とをできるかぎり浮かび上がらせてみることにしたい。

アーネストとアリスの交差

アーネストの日本美術コレクションは、すでに1886年の段階で1500点以上もの膨大な量にのぼっていた。その年の5月に、ロンドンのロイヤル・ソサエティ・オブ・アーツにて、各種工芸から絵画におよぶ膨大なコレクション展が開かれることになった。同会場でアーネストは、5月4日、11日、18日と三回にわたって日本美術についての講演を行っている。³ その講演の謝辞にあるように、多岐にわたるコレクションの収集を手助けしただけでなく、分類や陳列を監修したのは、パリの美術商であった林忠正であった。⁴ その日本美術についての講演は、早くも1886年の末には日本で紹介

されていた。⁵にもかかわらず、同一の人物とみなされなかったのか、1891年の来日に際しては高名な医療ジャーナリストとして医学者の間でしか注目されることはなかった。日本でもっばら知られているのは、アーネストが帰国後にトインビー・ホールで行った「催眠術といかさま師」という講演である。1892年1月号の『19世紀』誌に載った講演録の前半を、25才の夏目漱石が「催眠術」(1892)として翻訳したからである。⁶

一方、アリスもまた夫ほどではないが日本美術に関心をもっていた。特に工芸に対する熱意は、夫以上だったといえる。アリスの場合は、熱心に収集するというよりも、慈善活動の一環として工芸製作の指導とその販売に意を注いだ。『大英百科事典』でも若干触れられていたように、アイルランドが飢饉の惨状から立ち直れるよう、家内工業(cottage industries)の振興に目をつけ、アーネストと共に、1883年、北西部のドニゴール州に産業資金(The Donegal Industrial Fund)を設立したのである。その資金を元にアリスは、村の女性たちに針仕事を教え、ケルズ・エンブroidアリー(Kells Embroidery)と呼ばれる刺繍や織物の製作を指導してゆく。そのときアリスは、8世紀にアイルランドで製作された聖書の写本である『ケルズの書』からデザインを取り入れるとともに、日本からの意匠を融合させている。⁷その1888年の作品におけるジャポニスムは、夫妻がロンドン日本協会(1892年設立)の会員であるところから推測されてきたが、影響源として照合されるべきなのは、1886年開催のアーネストコレクションであろう。なお、こうした経歴ゆえにアリスは、来日に際しても染織工場を訪問しており、京都の西村總左衛門の工房を見学するなど、機械化に頼らずに上質の品物を生み出していることに驚嘆し、帰国後の講演で、英国はその工程に学ぶべきことを訴えることになる。⁸

二人が慈善活動に熱心だったのは、いわば相乗効果といってよいだろう。そもそもアーネストは、『英国医学雑誌』に関わる前、すでに『ランセット』誌で働いていたころから、工場労働者の環境改善など社会衛生に強い関心を抱いていた。そして、アリスことアリス・ローランド(Alice Rowland)と結婚後、アーネストは彼女の姉妹であるヘンリエッタ・ローランド・バーネット(Henrietta Rowland Barnett)を知ることになる。彼女とその夫サミュエル・バーネットとつながりが生まれたことは、アーネストにとって決定的に重要であるはずだ。⁹というのも、このバーネット夫妻もまた社会改良家として知られ、労働者の福祉と教育のためのセツルメントとして、ホワイトチャペルにてトインビー・ホールを1884年に設立することになるからである。したがって、アーネストが「催眠術といかさま師」を含め、いくつかの講演をトインビー・ホールで行ったのも、アリスがアイルランドで工芸品製作による自立支援を行ったのも、ヴィクトリア朝によくみられた社会改良運動の一環として関連づけられることになる。

ケルズ・エンブroidアリーのジャポニスム ケルトと極東の出会い

すでにいくつかの先行研究が指摘するように、アリスが関与したケルズ・エンブroidアリーにおいては、アイルランド古来のケルト文様と日本趣味とが同居していた。技術指導において英国と同じものではなく、郷土色としてケルト文様に注目し、『ケルズの書』にまでさかのぼって取り入れたのは、アリスの功績といわれる。しかし、

これは1880年代のアイランド文芸運動だけでなく、同時代の工芸の郷土色をめぐる議論との関係を見落とすべきではないだろう。たとえば、1878年のパリ万博におけるインドの工芸についての議論が挙げられる。その英領インド部門の公式解説書において、ジョージ・バードウッドは、とりわけ陶芸が、インドの「伝統」を忘れた英国製品の「バスタードな」模造品でしかないと厳しく批判し、インドの工芸を立て直し、機械化から守ることを強く訴えたのだった。1879年に同じ趣旨から書かれたバードウッドの公開書簡は、ウィリアム・モリスほか多くの賛同者を集めた。モリス自身、講演「民衆の芸術」（1879）のなかでバードウッドに言及しながら、征服された民族が、征服者のつまらない文化を模倣してしまう、いわば文化の植民地主義が見られると述べたのはその現れである。¹⁰

バードウッドは、インドの工芸が繰り返し立ち返り、模範とすべき「伝統」として、アジャンタの石窟画を挙げた。そうして1880年代のインドでは、その文様や意匠をとりこんだ作品が多く作られ、博覧会などを通じて英国などで販売されることになった。アリスが『ケルズの書』に注目したのは、古代からの意匠が「伝統」としてあたかも血の中に脈々と受け継がれているかのように擬装する、当時のこうした潮流に掉さすものと考えてまずさしつかえあるまい。事実、アリスの戦略は見事に功を奏する。彼女は1888年にロンドンの見本市会場であるオリンピアで開催されたThe Irish Exhibitionの共同企画者となり、ケルズ・エンプロイダリーのロンドンでの販路拡大に大きく貢献することになった。当時の代表的な女性雑誌『クイーン』に掲載された記事を見ると、その展覧会は単なる販売会ではなく、アイランド人女性の家庭や家を再現して、そこで糸巻き車や刺繍を行う展示であったことがわかる。¹¹ こうした職人を家ごといっしょに展示し、その手仕事ぶりを再現することで、工芸製品の販売を促進するというのは、その3年前、1885年にロンドンのナイツブリッジで好評を博した日本人村という先例があった。ひょっとするとアリスはそこからなんらかの着想を得たのかもしれない。

では、そうしたアイランドの伝統と、なぜ日本は同居させられているのだろうか。第一の理由としては、アリス自身を始め、当時の英国人の多くが日本の工芸品を高く評価していたことが挙げられよう。同時代英国の流行を追うよりも、英国で取り入れられている日本趣味をじかに取り込もうとしたといえるかもしれない。古人の跡を求めるのではなく、古人の求めようとしたところを求めた戦略は、二番煎じとして墮すところがなく、賢明な戦略といえるだろう。もう一つの理由としては、当時、アイランド、とりわけケルトはその東洋の起源が強調されていたことも考えられる。¹² 事実、『ケルズの書』を一躍、当時の英国で知らしめたのは、オスカー・ワイルドにもその図版だけは賞賛されたマーガレット・ストークス (Margaret Stokes) の *Early Christian Architecture in Ireland* (1878) や *Early Christian Art in Ireland* (1887) なのだが、これらのなかで、ケルトの文様やデザインはインドや日本との共通点があると述べられているのである。ただしストークスは慎重な態度をとっており、「ケルト人と日本人のあいだに共通の起源となるコミュニティ」があったのか、「独自に同じ物を思いついた」のかは不明とするJ・F・キャンベルの著作から一節を引用している。¹³ 加えて『ケルズの書』には、ピザンチンを初めとしてエジプトなど東洋的要素の混入が指摘されており、そうした土壌も手伝ってのことであっただろう。ただ、ケルトが東洋と共通の起源をもつということが二つの可能性のうちの一つとして挙げられてい

ることからもわかるように、実際にケルトを東洋の一部とみなし、日本から西アジアに広がる東洋という紐帯を夢想することは、19世紀末から1920年代にいたるまでしばしば見られた現象だった。たとえば、岡倉天心の『東洋の理想』（1903）に序文を寄せたニーヴェディータこと、アイルランド出身のマーガレット・ノーブルは、「アイルランドという極西と、エトルリア、フェニキア、エジプト、インド、中国」に「共通の初期アジア美術」が存在した可能性に触れている。¹⁴ 岡倉はアイルランドにはほとんど触れていないため、おそらくストークスが示唆にとどめたようなケルトと東洋のつながりを前提にしての評言といえよう。

1891年の来日 アーネストとアリス

それではアーネストとアリスの来日は、どのような足跡を残したのだろうか。アーネストについて、もっとも詳しく紹介しているのは『成医会月報』であるが、来日が招待によるのか、夫妻自身の希望なのかはあいにく記載がない。それによれば、正確な来日は不明ながら、1891年の3月30日に夫妻は東京で歓迎会に出席しており、5月14日には離日したという。¹⁵ なお成医会とは高木兼寛が設立した現在の東京慈恵会医科大学の前身であり、月報といってもこれは、一部内容の異なった日本語版と英語版の両方が掲載された立派な学術雑誌である。高木は、ロンドンの聖トーマス病院医学校に留学しており、明治の医学界はドイツ医学が主流であったので、アーネストの来日を好機と見たのだろう、数回に渡って講演を依頼している。アーネストの講演の記録は、*Japan Mail* 紙からの転載と断ったうえで、全文が収録されているが、日本語版には邦訳も要約もみられない。内容はというと、日本の医学界への賞賛と提言、そしてコレラの予防についてである。内容が専門的だったためもあるだろうが、ハート夫妻の来日はほとんど同時代の日本で注目されなかったようである。

それではアーネストの日本の医学への感想と提言について、同じく『ジャパン・メール』紙の4月9日に掲載されたという講演録を見てみよう。こちらは自身が編集する『英国医学雑誌』に再録されたものであり、英国向けであるだけに、アーネストの本音がうかがえるように思われるからである。¹⁶ その冒頭では、日本美術のコレクターであることこそ触れられていないが、「私の母国を始め多くのヨーロッパの国々が粗野で野蛮でおよそ洗練とほど遠かった時代に、抽象的で形而上的な洗練そのものといった知的な文化と美術とを享受していた日本」への賞賛が続く。一方で、昨今の日本の文明化に驚嘆しており、ちょうど滞在中に戦艦が完成し、天皇が進水式に出席したことを挙げている。こうした最新の戦艦が日本人自身により日本のドックで作られたことについて特記しているのも、おそらく初の国産巡洋艦であった橋立のことを指してのことだろう。橋立は、天皇も出席した進水式が3月24日に行われたので、¹⁷ もしそうだとすれば、アーネストとアリスの来日は、3月の20日前後であったのかもしれない。いずれにせよ、こうした戦艦建造の話の枕にして、同様に西洋の医学と医学教育が日本人の手で導入されたことを賞賛し、いくつかの問題点を指摘している。病院施設の充実や、看護婦への高い給与の必要性とならんで、ミュージアムが不十分というのは、日本美術の大収集家としてよほど失望を隠せなかったことが忍ばれよう。ただ、全般的に医学に邁進する姿を暖かく見守る態度であり、さして厳しい批判は述べられていない。

なお、コレラ予防について講演しているのは、アーネストは、当時、一般の人々にも知られるようになった細菌理論の啓蒙につとめ、不衛生な住環境によりコレラが蔓延することに注意を喚起していたからであろう。あるいは1879年に起きたヘスペリア号事件が念頭にあったのかもしれない。日本政府による検疫に対して、英国が治外法権を理由に検疫に従わなかったため、コレラが蔓延するのだが、その結果、日本ではまさしくアーネストが訴えたような水道事業の発展が引き起こされたからである。

一方、アリスは夫の講演や医学については当然ながら触れることはない。鹿鳴館なきあと、外国人の接待によく使われた東京は芝にあった紅葉館にて、夫妻は接待をうけているのだが、そのときに入手したのであろう、そこの芸者が使っていたという扇子を紹介しているくらいである。¹⁸興味深いのは前述した染織工房についての高い評価である。ちなみにアーネストは1886年の講演で、日本美術は古い物ほど優れており、最近のものは産業化によってあるいは西洋向けのために粗悪なものが大量生産されており、本来の美しさを知るためにも自分のコレクション公開は意義があると、当時であって典型的な日本美術評を展開した。¹⁹一方、そうした定説に反論したのがアリスである。帰国後の1892年6月15日、ロンドン日本協会での講演で、たしかに昨今の日本の機械化と文明化は日本美術にとって脅威かもしれないが、現在の美術産業（art industries）は、これまで同様に優れた美術品を生み出していると述べ、七宝や陶磁器を挙げ、縮緬について詳述している。たしかに、「ヨーロッパの影響をいまだ受けていない美術」としての紹介ではあるが、アリスは手仕事の優位こそ強調し、機械化を否定的にとらえてはいるが、文明化や複製そのものを否定しているわけではない。そして、アリスはそんな日本から学ぶべきことを強調する。

日本は英国の科学や、防衛手段、自治獲得のための理論について熱心に学んでいる。一方、私たちの方はといえば、日本を取り入れたり、取り込もうとしたりはするものの、あまり学ぼうとする機運はなかった。自分たちの製造業なら改善できるかもしれないが、むしろそれだけ多くの日本の美術を台無しにしてしまうところがあるのだ。

私にとって日本は、多くのことを教えてくれる国である。すばらしい美術産業（art industries）にあふれ、我慢強く洗練された人々の、つつましかで、熱心で飾り気のないところは見ていて気持ちがいい。²⁰

ここでアリスが、講演の題目で Industrial という用語を使っているのは注意してよいだろう。機械化や西洋化をやみくもに否定するのではなく、西洋文明の化学染料と、型染めという複製、そして手彩色という、複数の要素が組み合わさった調和を肯定的にとらえ、それに学ぼうと述べているからである。²¹

帰国後のアリスとアーネストの交錯

1892年に帰国してからというもの、アーネストは日本についてほとんど触れないようになってゆく。前述の「催眠術といかさま師」では、睡眠中に受けた刺激が夢に影響を及ぼす例として、眠っている時に熱い状態に置かれれば、富士山かヴェスヴィウス火山にいるような夢を見るだろうと、あたかも富士山を活火山のようにみなして

いる記述がある。²² ひょっとしてこれは、夫妻が帰国して、半年ほどした1891年の10月におきた濃尾地震のせいかもしれない。地震の惨状は英国でも詳しく報道されたうえ、夫妻もどうやら滞在時に地震を経験したらしいからである。ただ、この一事が示すように、アーネストはロンドン日本協会の一員であり、日本美術のコレクターではあったものの、日本旅行によって日本についての知見を深めたというわけではなかったようである。

実際、1892年にはコレラが勃発し、アーネストはthe Committee of the National Health Societyの座長として多忙を極めることになってゆく。興味深いのは、この当時、コレラはアジア・コレラ(Asiatic Cholera)と呼ばれるように起源がアジアと考えられており、アーネスト自身も、コレラがインドを始めとする東洋からヨーロッパに上陸することを極度に恐れていた。アーネストは先の『19世紀』誌で予防のための啓蒙活動にいそしむのだが、そこで彼は、コレラというアジアからの脅威に対してヨーロッパ文明は共同して防御をしなければならないこと、とりわけメッカほかの巡礼者が口にし、彼らが持ち運ぶ汚れた水が感染源となるため、上陸を防ぐべきことを訴えたのである。²³ いうまでもなく、ここではアジアからの脅威という典型的な黄禍論が見られ、アーネストは、今度はロンドンではなくインドの衛生問題に心を砕くことになる。しかし、インドでアーネストが思い知らされたのは、コレラへの十字軍で旗をふるべき英国は、むしろ細菌学の分野で諸外国に遅れをとっており、しかも二年前に先進国の立場から苦言を呈したアジアの一国だったはずの日本出身である北里柴三郎が、ペスト菌を発見したという事実であった。²⁴ 1894年に日清戦争が勃発し、アーネスト・ハートはトインビー・ホールで戦況の見通しを講演しているが、わずか四十年ほどまえに開国したばかりの日本の文明化の速度に驚きを隠せない一方で、その点が清朝とは大きく異なることを淡々と説明している。自身が二年前に見た橋立号が、戦争では活躍することになるのだが、そうした日本での見聞をハートが語ることはなかった。²⁵

このようにアーネストが過去の日本美術にしか関心が持てず、日本での経験を帰国後生かすことがなかったのに対して、アリスは縮緬について日本協会で講演するなど、積極的にその知見を利用することになった。帰国後の9月30日からしばらくのあいだ、夫妻は旅行の際に買い集めた珍品をトインビー・ホールで展示しており、ロンドンより遠くへ出かける機会のないホワイトチャペルの住人には「極東の驚異」を伺う格好の機会だと好意的に紹介する記事も刊行されている。²⁶ しかし、それらを買求め、展示に関わったのは、おそらくアリスだったのではないか。アリスは、アーネストとは異なり、それら日本からの品を美術品として収集することよりも、アイルランドの工芸の発展のため、応用ないし適用することに心を砕いたからである。トインビー・ホールでの展示会から二ヶ月ほどして、アリスは、そんな作品をロンドンで展示即売し、いくつも好意的な評を得ることになった。そんな記事の一つを引用してみよう。

ロンドンのウイグモア通りにあるドニゴール・ハウスにて、アーネスト・ハート夫人による訓練と奨励のもとで、アイルランドの農夫が製作した興味深い作品の展覧会が開催されている。最近、ハート夫人は日本を訪れ、当地でさまざまな美術産業を学び、その工程を研究しただけでなく、日本の縮緬や絹織物、刺繍な

ど色とりどりの芸術的な見本も多数持ち帰ってきた。なかにはアイルランドの産業作品に使えるように独自に加工されたものがあり、ドニゴール・ハウスでは、そうした作品も見ることが出来る。飛ぶ鳥に飛び跳ねる鯉といった日本風の装飾がほどこされたアイルランドの亜麻布の屏風、アイルランド人の手で錦鯉をスモッキングで飾ったかわいらしいフロック、日本人が手彩色した縮緬にアイルランド人が日本風に刺繍したもの、「月に叢雲」の絹地で飾ったアイルランドのポプリン・ドレスなどがそれである。様式が異なるだけでなく、大胆に変更しているが、こうしたアイルランドの作品は、器用な日本人の手による作品と比べて、おむね遜色ない出来映えとなっている。²⁷

ほかにもクリスマスセールを伝える記事では「北斎」を引用したテーブルカバーに言及があり、²⁸ ジャポニズムの定番ともいえる主題をアイルランドの工芸に結合させたアリスの手腕は、当時の新聞だけみても高く評価されていたことがわかる。こうした成功を経てアリスは、1893年のシカゴ万国博覧会でのミッドウェイ・プレザンスにて、Irish Villageの主要責任者としてケルズ・エンプロイダリーを、職人と同時に展示し、販売することになった。そのとき展示されたのは、1888年のオリンピアの時と同じような三つの糸巻き車であり、その連続性は明らかといえる。²⁹ なお、そのときミッドウェイ・プレザンスの隣で軒を並べることになったのは、奇しくもJapanese Bazaarであった。³⁰ ナイツブリッジから始まった職人の展示と工芸の販売は、こうしてシカゴで再び隣り合わせになったといえるかもしれない。そして、このミッドウェイ・プレザンスを通り抜けて博覧会の会場に入ると、正面の女性館の向こうには日本館の鳳凰殿があった。この英文解説を書いたのは岡倉天心なのだが、アリスがそれを読んだのかどうかはあいにくわからない。

おわりに

こうしてアーネストとアリスの活動は、1892年の来日を境にして大きく交錯していくことになった。アーネストはたしかに膨大な美術品をコレクションしたが、その知見は古き良き日本を愛でるといった古典的な収集家の域を越えるものではなかった。美の日本という彼の幻想をおびやかす西洋化と文明化は、予想外に、彼の専門であった医学の分野における優位もおびやかすことになった。アーネストはそうした変化に戸惑いつつ、彼の日本趣味と折り合わせることはついぞなかった。日本旅行はその点で、大きな変化も実りも残さなかったといえるかもしれない。

漱石がアーネストの「催眠術といかさま師」の前半部分のみを翻訳したのは、アーネストと日本のすれ違いを象徴する逸話といえるだろう。題名からも明らかなように、そしてトインビー・ホールでの講演というところからも伺えるように、この講演は、催眠術が詐欺にほからないことを強調することにこそ力点がある。講演では、前半にやや皮肉めいた口調で催眠術の「驚異」を紹介しながら、後半でそのからくりが暴かれていく。しかし、漱石はその後半を翻訳していない。しかも前半部分にみられるそうした伏線を曖昧にして訳したため、およそアーネストの企図がうかがえないようになっているのである。³¹ なお成医会でのアーネストの講演には、後年、ロンドンで漱石が親しく交わることになる池田菊苗が出席していた。³² 二人の間で、アーネストが

話題にのぼったのかどうかは不明だが、³³アーネストが日本美術にみられる旧来の日本と欧米の医学に肩を並べようとする新しい日本とのあいだで分裂していたように、日本でもアーネストは双方別々の形で言及され、ついで結びつけられることはなかったといえるだろう。

それに対してアリスは、日本滞在中、ハート夫人としてしか注目されなかったようだが、多くのものを見学し、手にしたのは彼女の方だったようである。いみじくも日本協会の講演で自身が述べたように、新しい日本から学んでみせたともいえるだろう。日本の工芸をアイルランドに応用し、日本の工芸におけるほどよい文明化を絶妙な調和と考え、後にそれはシカゴ博覧会にまで応用されることとなった。ただそれはアリスが、アーネストのように美の日本にとらわれていなかったというわけではない。彼女は、英国に比べ、日本では子供たちまでもがおだやかであることに感動し、それは彼らの米と魚の食事のせいであり、英国人は肉食ゆえに粗野になるのだと述べ、失笑気味に報道されることにもなっている。³⁴以上の素描からも明らかなように、この二人の交差と交錯は、転機を迎えた日英関係と同時に、世紀転換期の英国における社会変動を同時に映し出しているといえるだろう。本稿は、そのささやかな中間報告の試みにほかならない。

註

- 1 本稿は、三重県立美術館にて2012年9月29日に開催されたジャポニスム学会第3回例会「世界に広がる型紙 型紙研究の最前線」において、司会者として述べたコメントに基づいている。機会を与えてくれた寛大な関係者の方々に改めて感謝したい。
- 2 *The Encyclopædia Britannica*, 11th edition, vol.13 (New York: Encyclopaedia Britannica, 1910), p.30.
- 3 そのErnest Hart, *Lectures on Japanese Art* (Lodnon: W. Trousce, 1887)には、アーネストの講演とともに、詳細な展示カタログが付せられている。
- 4 Hart, *Lectures on Japanese Art*, p.2.
- 5 アーネストの講演は、1887年の書籍刊行前に英国の各種新聞で掲載されており、それにもとづいて日本でも紹介記事が書かれていた。大阪朝日新聞が、1886年6月30日および7月4日に「日本美術の品評」と題して梗概を紹介しているほか、読売新聞では、「日本美術品の説」と題した全訳が1886年12月3日から1887年の7月26日までの長きにわたって訳載されている。
- 6 『漱石全集』13巻(岩波書店、1995)、p.630。無署名記事ではあるが、同定は全集に従う。
- 7 Barbara Morris, *Victorian Embroidery* (London: H. Jenkins, 1962), pp.118-9. Paul Larmour, 'The Donegal Industrial Fund', *Irish Arts Review Yearbook* (1990), p.132. 鈴木暁世「20世紀初頭のアイルランドにおける型紙の受容と展開」、藤田治彦編著『頭脳循環プログラム報告書 アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究——日英間に広がる21世紀の地平——』p.53.
- 8 Mrs. Ernest Hart, 'Some Japanese Industrial Art-Workers(Crape Printers)', *Transactions and Proceedings of the Japan Society*, London, vol.1, 1893, 49-59. この講演はまた型紙のステンシルとしての用途を決定づける役割も果たしており、その点については、高木陽子「英国におけるジャポニスムと型紙」、『Katagami Style』展カタログ(2012), pp.269-270を参照。
- 9 Seth Koven, *Slumming: Sexual and Social Politics in Victorian London* (Princeton: Princeton University Press, 2004), pp.301-2, note1.
- 10 詳しくは橋本順光「ジョージ・バードウッドのインド工芸論」『ヴィクトリア朝文化研究』9(2011), 73-77を参照。
- 11 Fintan Cullen, *Ireland on Show: Art, Union, and Nationhood* (London: Ashgate, 2012), p.139および掲載の図版を参照。
- 12 東洋の起源を強調されたアイルランド独自のオリエンタリズムについては、Joseph Lennon, *Irish Orientalism: a Literary and Intellectual History* (Syracuse: Syracuse University Press, 2004)が最も詳しいが、アリスやケルズ・エンブroidグリーには言及がない。

- 13 Margaret Stokes, *Early Christian Architecture in Ireland* (London: George Bell, 1878), p.125 およびその注 1.
- 14 Nivedita's Introduction, *The Ideals of the East* (London: John Murray, 1903), p.xiv.
- 15 『成医会月報』 (*Sei-I-Kwai Medical Journal*), vol.10 (1891), pp.80-81, p.136.
- 16 Ernest Hart, 'An Address on Medicine and Medical Organisation in Japan', *British Medical Journal*, May 23, 1891, pp.1111-1114.
- 17 たとえば読売新聞の 1891 年 3 月 26 日には、24 日に横須賀で行われた「軍艦橋立号の進水式」について、天皇の行幸ともに詳細が記されている。
- 18 Mrs. Ernest Hart, 'Japanese Fans', *The Decorator and Furnisher*, vol. 23 (1893), pp. 25-26.
- 19 Hart, *Lectures on Japanese Art*, p.2.
- 20 Mrs. Ernest Hart, 'Some Japanese Industrial Art-Workers(Crape Printers)', p.50.
- 21 たとえば、明治においてワグネルの技術指導による七宝の発達と、西洋での高い評価とも同じ範疇に属するといえる。詳しくは橋本順光「日本美術の西欧への衝撃 ジャポニズムの誕生」『国文学 解釈と教材の研究』2005 年 1 月号 pp.67-72.
- 22 Ernest Hart, 'Hypnotism and Humbug', *Nineteenth Century*, 31 (1892), p.32. なお漱石はこの部分を訳していない。漱石が訳したのは、p.30 の前半までである。
- 23 こうしたアーネストの扇情的ともいえる警告は、H・G・ウェルズによって、科学者からウイルスを強奪してばらまこうとする（おそらく英国初の）細菌テロの物語へと援用されることとなった。アーネストの主張とその余波について詳しくは Hashimoto, Yorimitsu. 'Victorian Biological Terror: A Study of "The Stolen Bacillus"', *The Undying Fire: The Journal of the H.G. Wells Society*, The Americas, 2 (2003), pp.3-27 を参照。
- 24 Ernest Hart, *The Medical Profession in India* (Calcutta, 1894), pp.73-5.
- 25 'Japan in Peace and War', *The Leeds Mercury*, 1894 October 15.
- 26 *The Sheffield Daily Telegraph*, 1891 October 1.
- 27 *The Liverpool Mercury*, 1891 December 10. こうしたアリスの日本趣味とケルト趣味との同居についての詳細な分析は、2011 年 7 月 23 日にロンドンの Victoria and Albert Museum で開催された New Perspectives on Asian Design and its Histories: Geographies, Chronologies, Methodologies での口頭発表 Akiyo Suzuki, 'Japonisme and the Celtic Revival in Art and Design in the Early Twentieth Century' があるのみである。
- 28 *The Sheffield Daily Telegraph*, 1891 December 8.
- 29 Cullen, *Ireland on Show*, pp.135-139.
- 30 *The Economizer: How and Where to Find the Gems of the Fair with Diagrams Locating the Exhibits of the World's Columbian Exposition* (Chicago: Rand, McNally & Co., 1893), pp.62-63.
- 31 佐々木英昭『漱石先生の暗示』（名古屋大学出版会, 2009）, pp.190-201.
- 32 『成医会月報』 (*Sei-I-Kwai Medical Journal*), vol.10 (1891), p.72
- 33 なお漱石が訪れる前にロンドンにいた南方熊楠は日本協会の会員と親しかったため、アーネストを知っていたようだ。しかし、「尻の慎みは今の欧人が昔よりも改進したのだ。（中略）故アーネスト・ハートなどは、人と語る中ややもすれば句切り同然に放っていたが、それは廉將軍の三遺失に等しく、甚く毫れたのだ」というくらいしか言及はなく、さしもの博学な熊楠もアーネストのことはあまりよく知らなかったようである。『南方熊楠全集』第 1 巻（平凡社, 1971）, p.240 を参照。
- 34 'Meat Eating and Bad Temper', *Echo*, July 10, 1893.